

# ナースリー・スクールにおけるしつけ

キヤサリン・H・リード



しつけというものは、子どもに、自分の責任を認知させることに役立つものである。ナースリー・スクールにおけるしつけについてのこの記事は、あらゆる年齢の児童を扱うおとなにとって、重要な意味を示している。キヤサリン・H・リード女史は、コーバリスの、オレゴン州立大学、家政学部所属ナースリー・スクールの主事である。

「ナースリー・スクールでは、子どもに何でもしたい放題にさせているそうですね」「ナースリー・スクールでは、しつけはないことになっているそうですが……」ナースリー・スクールの

先生たちはだれでもこうした言葉を、いつかは聞かされているものである。ナースリー・スクールに行っている子どもの親たちの多くは、いろいろ批判を聞いて動搖する。小学校の多くの先生たちも、ナースリー・スクールでは、一体どういうしつけをしているのだろう、と不審に思っている。

もちろん、こうした発言にたいして、でき得るのは、「私たちには、しつけがよいものであると思っているのは当然で、もししつけをしないとすれば、どうやつて皆が一緒に生活していくでしょう」と答える以外はない。

本質的な問題点はどういうものか？

通常、しつけに関する問題は、昔ながらのよく知られているしつけの方法が行なわれていない時に、どういう方法がとられているかということを認識することにかかっている。

私たちは皆、しつけはすべきものだと思つてはいるが、果たして、しつけとは、どういうものであると考えているのだろうか？罰の形で与えられるしつけ——たとえば叱るとか、おいしいものの、

楽しいことを拒否する、取り上げるなどは、私たち全部がはつきりそれとわかるものである。しかし、しつけが他の形で示される時、悪い行いをさせないようにして、効果をあげた場合とか、

また、思いやりのある扱いをした場合には、時として、見すことされてしまうことがある。ひとりの子どもが、他の子どもをぶつても、その子どもが親切に扱われているのを見ている人は、そこに実際に何が起こったかは見落としていることがある。その人は、いつも見慣れている罰が与えられなかつたことだけに気付くかもしれない。

きびしい、ボス的なタイプのしつけから、大きくゆれ動いて、最初は、文字通りに、『子どものしたい放題にさせる』容認主義に移つたことがあつた。ちょうどこの頃、ナースリー・スクールの数も増加してきた時代だったので、昔流のしつけのしかたから大きく移行したこの変動が、人々に強く印象つけられたのである。

ナースリー・スクール関係の人々は、この両端から中道に戻すために、苦労して、自分たちの流儀を求めざるを得なかつた。またしつけとは、どういう意味なのか、その意味づけを再検討する必要があつた。これらの人々のたどつた経験は、他の先生たちにも役立つことであろう。

### ふさわしいしつけをすること

今日では、ナースリー・スクールの先生たちはどういうしつけをしようとしているのであろうか？

まず第一に、私たちは、子どもに合うように私たちの要求をだんだんに減少させていくことを学んでいる。これは他のことはあともわしにおいて、一時にひとつの事柄を習わせることだけに集中するという意味である。たとえば、ひとりの子どもが、家庭で新たに生まれてきた弟や妹の存在に適応しようとしている時は、おそらく私たちは、その子の気に入りのナースリー・スクールの玩具を、他の子どもと共有するように強制することはしないであろう。彼が家庭で必然的にしなければならない共有という重荷を軽くしてやるために、この時期には少しばかり『利己的』にさせておくこともあり得る。今は、生まれた赤ちゃんと気持ちよく生活することこそ、まず第一にしなければならない骨の折れる仕事なのである。

子どもによく合つたしつけをするということは、どんなことがまだ学び得れないかを決定するのと同様に、今どんなことが一番学びやすいのかを決めるという意味である。正常で健康な二歳児ならば、何でも物に触れてみたいというすさまじい衝動をもつてゐることは私たちは皆よく知っている。二歳児のグループでは、先生は、さわっていけないものは黙つて静かに、手のとどかない所に片付けてしまう。もちろん、ある時には、子どもたちは、物

に触れてはいけないことも、習わなければならないことではあるが、こうしたことを学ぶのは、二、三歳児よりは、四、五歳児の発達の様相にずっとよくあてはまる。

二歳児に物に触れるなどいつてしつけることは、お行儀のよい子にするよりはむしろ、自発性のない子どもにするようになるであろう。

よいナースリー・スクールでは、物にさわったからといって、小さな子どもが罰せられるようなことはない。その代り、多分、先生が、子どもと、そうした誘惑との間に立ちふさがっていることに気づくことであろう。では、何の訓練もないといえるだろうか？ 先生は、その子どもが、自発的な、自信のある人間でいられるような援助をしているのである。まず第一にすべきことをまつ先にすべきである。

また同じように、子どもが食べ物をこぼしたり、食べる時に、指でつまんだということで訓戒が与えられもしない。ナイフやフォークを上手に使いこなすには、筋肉がまだ十分に発達していないからである。しかし、テーブルの隣りに腰かけている子どもを、絶えずつづいたりしている子どもは、すぐ制止されて、多分、もつともやんとしていられるような場所に移されてしまうだろう。言葉をかえていえば、その子どもが自分でどうにかできるレベルまで問題を引き下げるということである。

これはまた、個々のケースによって、それぞれの事情は変わってくる。ひとつ事例を示すならば、ベッツィという女の子は、りこうな三歳児であるが、「二歳上の姉の支配から逃れようと必死になっている。姉のほうは、たいへんに嫉妬深く、家ではベッティのする一舉一動を、ほとんど自分の思い通りに服従させることでそれを表現しようとしている。ナースリー・スクールの自由さの中でベッティは、ほつとして、くつろぐことができるが、ちょっとでも何か支配的に思えることがあれば、敏感に感じとつて、憤慨する。

ある日、何か気に入らなくて、カットなって、本を床に投げつけた。先生は静かに、「机の上に、本を拾っておのせなさい」といった。ベッティは、むつとして、「いやよー、いつもあなたのしたいようにできないわよ」といった。

人はいつも誰かに支配される必要がないということを、その子どもが何とかしてわからせようとしていることが理解できたので、先生は次のように答えた。

「それは本当ね。できませんね。では今度だけは先生が自分で拾いましょうね」何のしつけもしていないのだろうか？ あるいはそうかもしれない。しかし、そうすることで子どもの反抗心をやわらげ、そして、そのうちつかは、自尊心と、自信とをたやすくもてるようにしていくことになるであろう。

許せる範囲、限度についてははつきりとさせること

ナースリー・スクールでは、私たちのきめる制限については、はつきりとさせ、そして事情のゆるす限り、一貫性のあるものにしようとしている。きまりを守るという点では、子どもに何を期待しているのか子どもにはつきりさせること——私たち自身にもはつきりとしているのと同様に、子どもの心にも、はつきりと納得できるようにすることだけが問題であることが、意外なほど多いものである。

また私たちが気づきはじめていることは、子どもたちは、制限をすることに進んで責任をとるおとな生活する場合には、ずっと自発的で、創造的になり得るということである。安全な制限内に自分がいると確信がもてる時には、どんな子どもでも、もつと自由に、いろいろ探求しようという気になるものである。

幼い子どもといふものは、激しい感情をもつてゐるが、この感情を抑制する能力はほとんどない。したがつて、ぶつたり、かみつけたり、物を投げたりしがちであり、その後で自分のしたことにおびえるような始末である。

自分たちが行き過ぎないうちに、止めてくれるおとなに依存することができるとわかれれば、安心もするし、もつとのびのびとするままる。子どものする無分別な、破壊的な行動の多くは、誰か

が、自分たちを戒める責任をもつてくれるだろうという時点を正に求めているとみることができよう。自分がいうことを聞かず、いたずらをしたと思つてゐる時には、罰してほしいと望んでいるのは、子どもとしては、異常なことではない。すべての良い親や先生たちと同様に、ナースリー・スクールの先生たちも、筋道の通った制限を与え、それを守ることに責任をもとうとしている。

#### 規則や習慣などに一致する行動をさせるには、時を与えること

ナースリー・スクールのしつけには、順応を必要とする時は、それだけの時を与えることも含まれてゐる。昔ふうのしつけは、即座の、絶対服従ということを強調していた。しかし今日では、先生は、「外に出る前には、ブーツをはかなければいけませんよ」とはいつても、子どもが早速とんでも行ってブーツをはく、とは思っていない。事実、もし子どもが逆つても、驚くことはない。もしブーツをはかずに外に出ようとすれば、おしとどめて、規則をくり返し子どもに話して聞かせるが、子どもが自分なりの時をかけて、それを受け入れて納得するまで、子どもまかせにしておく。

それもやはり、しつけである。というのはブーツをはかなかつたら、外には行かせないからである。

こうした時、子どもはひどく感情的になつて、先生は嫌いだと

いうかもしれない。これを見た人は、これこそ、子どもがやりたい放題にしている例だというかもしれない。しかし、子どもが好き勝手なことをするのを許されないからこそ、こんないい方をするのだ、ということをみなさんは覚えていてほしい。

先生は、ちゃんと統制はとつてはいるのだが、子どもが自分の感情をありのままに出すことには、全く自由にさせているのである。人間の行動に関するいくたの研究から、私たちが習得したものがるとすれば、それは、感情は、表に出してしまおう必要がある、ということである。感情を自分の中にしまい込んで押えてしまふことは、人々を意地悪にしたり、また後になつてから、危険な人物にさえするものである。よいしつけこそ、害を与えない方法で感情を表現する道を開くものであって、感情の吐け口をふさいでしまうものではない。

それだから、「びどい先生」と子どもにいわれても先生自身は怒ることもないし、失敗だとも思わない。もし経験をつんだ先生であれば怒らずに次のようにいふだろう。「あなたがブーツをはかずに出ようとしているのに、私が行かせないから、悪い先生だつて思うのは、よくわかつてますよ」そして先生は、多分ブーツがきつくてはきにくいし、どんなにか外に出て、フランコや三輪車に乗りたいだらうとの小さな人に同情をする。そこで、何とか、もっとやさしくする方法を講じようとするだらうし、ま

たその子どもが思つたままの感情を「吐き出す」ことができたのはよかつたと思つている。

が、しかし、やはり規則として、ブーツをはく、ということは守るであろう。このことは、訓戒はほとんど与えられていないともいえるが、しかしこれが、形の違つたしつけなのである。

もし子どもが他の子どもをぶつことで、自分の怒りを「発散」させようとしはじめたら、先生はすばやく、またきつぱりと止めてしまう。先生は子どもが怒ったことに対して非難することはないが、その表わし方としては、害のない範囲の中で処理するよう子どもに力を貸そっとする。言葉は、子どもの発達段階にふさわしい感情表現の無害な吐け道である。

もちろん、四歳ではなく二十四歳にもなれば、自分の上役に、自分がどう思つているかを口に出していくことはできないのは当然だが、その頃になれば、自分の感情の吐け道としては、他の方法が開けているはずである。音楽や、芸術または運動にそうした感情の吐け口を見出す時は、それを昇華とよんでいる。しかし三歳や四歳の子どもであつたら、彼の前に開けている直接の道を選ぶしかない。年齢相当の行動に出るより外にはない。

子どもは許される範囲の限度をためしている。

しつけに関する最後の問題としてつけ加えることは、ナースリ

ー・スクールの先生は、子どもが自己主張をしたがつたり、先生のきめた制約を“ためし”たいという止むに止まれぬ気持ちを尊重することはあっても、そうした場合に「いけません」ということを恐れはしない。

健全な子どもなら、時には、“そんなことは嫌”といつて、いうことを聞かないこともある。あるいは、“あっちへ行け”とはねつけたり、“したくないよ、と反抗することもある。先生は、たとえその反抗を行動に出すことを許さないとしても、その反抗はたいせつなものと見なすであろう。たとえばおひる近くなつて、園がひける時になつたら、いくら子どもが帰りたくないのも、子どもは帰らなければならない。その場合、先生は子どもが行きたくないという権利は尊重しつつも、彼が帰れるように力を貸すことになる。子どもの感情や行動に對して、“ということをきかない、わんぱくな子”といふこともないし、“はずかしめる”ようなこともしない。

むしろ、子どもが人に左右されずに自由に行動できる人になりたいと望んでいる点を喜んでいる。

このようなしつけは、子どもにとつては、信頼できる権威によつてきめられた必要な制約と共に、自分自身をも受け入れることを、ずっとたやすくしてやることになる。まだだんだんと精神的に成熟するに従つて、自制心を働かすようになるのにも、むづか

しくなく達成できる。反抗は子どもには健全なものであるか、しかし、それを容認することで、妥当なしつけを維持するという私たちの責任が軽くなるものではない。

子どもが、一生懸命に、自立しようと努力している時には、昔ふうのしつけ方はしばしば子どもに、屈辱感を与えるものである。それに比して、新しいしつけ方は、自主性を望んでいることに対しても尊重されていることを彼にわかるようにしむけるものである。ただし、その同じ自主的な自己にしていくためには、世間の人々に受け入れられる方法を見つけることを、当然強調しているのである。

さて、簡単に要約してみるならば、今日ほど、しつけが重要視されることはなかつたようと思われる。私たちが実際になつてゐる方法は、目標に達していないことも多々あるけれども、それでも、しつけの仕方にはいくぶんの進歩を遂げている。しつけは、現在では新しい形をとつてきつあるから、子どもを扱うすべての人々は、その新しい形式を十分に理解するように学ぶことが肝要である。両親も、先生も、しつけの問題に関して、共に緊密に手を携えていくならば、どの子どもにも力になり役立つことになるであろう。